

果樹試験場成果発表課題 要約

1. 和歌山県のカンキツ育種について

(主査研究員 宮井良介)

枝変わりから‘植美’や‘あおさん’を、珠心胚から‘YN26’を、交雑から‘はるき’を育成した。交雑実生の単胚・多胚性や雄性不稔性、珠心胚と交雑胚の判別を DNA マーカーで行った。また、‘あおさん’の品種識別マーカーを開発した。

2. 県オリジナル中晩柑‘はるき’の幼木・着果・貯蔵管理技術について

(副主査研究員 前田公博)

‘はるき’の現地への普及を図るため、幼木管理、着果管理、貯蔵管理技術の確立に取り組んだ。幼木の枝梢は、定植後2～3年放任し、その後切り返し等を行う。着果開始後の適正葉果比は120を目安とする。また、収穫果実はMA資材で包装することにより、常温で1か月、冷蔵することで2か月程度品質を保持できる。

3. 傾斜地カンキツ園でのドローンによる省力的施肥技術の開発

(主任研究員 水上徹)

傾斜地カンキツ園での施肥をドローンで実施するため、適切な散布手法について検討した。樹上3または4mで、樹列上を飛行ルートとすることで地表の散布ムラを少なくできる。また、4m幅で飛行させることで均一かつ最短距離での施肥が行える。

4. カンキツにおける夏季のドローン防除について

(副主査研究員 下村友季子)

ドローンを用いた夏季(6月～9月)の防除体系による高濃度少量散布の結果、黒点病、チャノキイロアザミウマ、ミカンハダニでは、病害虫によって対照の手散布と比べて優劣はあったものの、無処理より被害程度は軽くなり、薬害はなく、いずれも実用性はあると考えられた。